

都立中央図書館の在り方を考える有識者会議第3回議事録

日時：2023（令和5）年 9月 21日（木） 14時 00分～15時 00分

場所：オンライン開催

出席者：吉見座長、田中元子委員、中島委員

【事務局】

定刻になりましたので、都立中央図書館のあり方を考える有識者会議の第3回を開催いたします。委員の皆様におかれましては、お忙しい中ご出席いただきありがとうございます。教育庁地域教育支援部の児玉と申します。よろしくお願いいたします。

本日の会議は公開で、オンラインで傍聴されている方がいらっしゃいます。会議に先立ち、傍聴の方の、カメラ・マイク機能をオフとさせていただいております。発言やチャット機能の使用をされないようお願いいたします。

続きまして本日のご出席の委員を名簿順にご紹介いたします。

株式会社グランドレベル代表取締役社長の田中元子委員です。

【田中元子委員】

よろしくお願いいたします。

【事務局】

株式会社 steAm 代表取締役の中島さち子委員です。

【中島委員】

よろしくお願いいたします。

【事務局】

國學院大学教授の吉見俊哉委員です。

【吉見座長】

よろしくお願いいたします。

【事務局】

浅川智恵子委員、北野宏明委員、木村朝子委員は本日ご欠席です。委員のご紹介は以上となります。以後の進行を吉見座長にお願いいたします。

【吉見座長】

ありがとうございました。前回に引き続き重要な会議でございます。前回、皆様からすぐエキサイティングなご意見を出していただき、後で事務局からご紹介いただきますが、資料の「前回の主なご意見」というところにまとめられています。それを受けつつ、今日は軸を立てて全体をまとめていく作業になるかと思えます。コンセプトのベースとなる考え方ははっきりさせるというのが今日の課題だと考えております。

それでは、まずは事務局から、前回の主な意見やその他、今日の方方向性に関する資料を用意していただいておりますので、ひとつたりご説明をいただきたいと思えます。

【事務局】

教育庁地域教育支援部社会教育施設調整担当課長の吉田です。よろしくお願いたします。それでは、投影されているスライドをご覧ください。本日は前回いただいたご意見を振り返った上で、新たな機能について整理し、コンセプトのベースになる考え方、会議の取りまとめのイメージについてご説明いたします。その後、新たな機能の整理やコンセプトの考え方についてご意見を頂戴できればと考えております。

まず前回いただいたご意見についてご説明します。大変多くの貴重なご意見を頂いておりますが、本日は時間の都合上、一部のみのご紹介とさせていただきます。総論というカテゴリーでございますが、「お金がなかったり、親や学校とうまくいかなかったりしても、知の喜びに触れられることが図書館大きな役割」「リカレント、100年学び続ける時代の中で、図書館が重要性を増し、生涯学習の拠点にもなるのではないか」「デジタル社会の公共図書館を考えるにあたり、アクセシビリティ、コモンズの機能、デジタルデータの提供の3点が前提」等のご意見をいただいております。次に対象者につきまして、「本を媒介として、色んな層の都民に対し、実際の課題と本を繋ぐ立ち位置になれるか」「学びに対して、『それが何の役に立つんだ』と思っている人にこそ、何かきっかけになると良い」といったご意見がございました。インクルーシブにつきましては、「最新事例は常にキャッチアップしておくべき」「デジタル図書へのアクセスにおいて、あらゆる人が取り残されないロールモデルになって欲しい」等のご意見をいただいております。次に創造につきまして、「目的がなくても、『取りあえず図書館に行けば何か起きるかもしれない』と言う創発の装置といった発想の転換を打ち出すことがあっていい」「世界では図

書館が知るだけでなく、創る場に変りつつあると言われている」「自分がクリエイトする気持ちにさせてくれる『遊び場』が大事」「『本』を核に考えることにより『作る』と『繋がる』がつながるのが図書館」といったご意見をいただきました。空間・リアル・施設ですが、「本の見せ方や様々なイベントとの連携等により、実在することの特徴を出さないと電子図書館に対して存在意義がなくなっていく」「障害者に特化するだけではなく、遍く全ての人の暮らしがどうあるべきかを考えるべき」「ヘルシンキ中央図書館のような建物があれば、知に触れることが全く構えず、身近になる。感覚的に知性に対する距離を埋めていくことが課題」といったご意見をいただいたところでございます。

次のスライドですが、中央図書館の新たな機能ということで、前回のご意見等を踏まえて整理をさせて頂いたものとなります。本日はこの後に説明致しますコンセプトと合わせまして、具体的な事例等についてご意見をいただければと考えております。表の左側、新たな機能として、「あらゆる人の知的好奇心を喚起し、学びを深める」「多様な人との交流や創造活動を生み出す」「多様な知が集積する」「アクセシビリティ」という4項目で整理しております。図書館で好奇心が喚起されて、交流や創造を通して新たな知が集積して行く。これが循環して行くといったことについて accessibility を確保しながら回していくというイメージで整理させていただいております。さらに頂いたご意見を踏まえ、具体的な内容のイメージについていくつか検討したものが右の欄です。例えば、「あらゆる人の知的好奇心を喚起し、学びを深める」では、本への無関心層、子供や障害者など、多様な人を対象としたアプローチといったことが考えられ、具体的には他機関と連携した魅力的な展示やイベントの開催等がイメージとして考えられるかと思っております。

続きまして、新しい施設のコンセプトのイメージについてです。新しい図書館につきましては、将来的には広く、都民の方に分かりやすい形でお伝えしたいと考えており、そのためにコンセプト全体を貫く考え方について、ご意見等お伺いできればと考えております。このスライドでは前回までの議論を踏まえ、コンセプトにつながるようなキーワードを例として挙げさせていただきました。

次のスライドは、吉見座長とも事前に意見交換をさせていただきまして、議論のイメージを整理致しました。本日こちらのスライドを叩き台として、先ほども説明させていただきました新たな機能の表に記載させていただいたような話や、具体的なイメージを含めてご意見いただければと存じます。これまでの議論では「創る」「創造する」といったご意見を非常に多く頂いておりましたので、まずこれまでの議論を収斂するフレーズとして、Library for Creation を1つの大きな柱にすることが考えられるかと思っております。これまでの議論をまとめていくにあたりまして、誰に対してどのように新しいサービスを提

供して行くのか、どのような環境か、と言う視点で、図の黄緑の部分になりますが、整理をしていければと考えております。左側の WHO「誰が」は、これまでのご意見を元に記載させていただいております。右側の HOW も、ご意見をもとに書かせていただきました。より具体的なアイデアについて、本日、ご意見いただければと考えております。

次のスライドでは、創造的な技能を持つ他の図書館のコンセプト等を記載しております。創造・交流等の言葉が使われているケースが多く見受けられます。ご参考までに紹介させていただきます。

最後になりますが、10月中には今回の会議の取りまとめを公表したいと考えております。現時点で事務局でイメージをしているまとめ方の、項目だけ記載しておりますが。本日の議論を踏まえた上で改めてご相談させていただければと思います。お時間のない中恐縮でございますが、どうぞよろしくお願いいたします。事務局からの説明は以上です。

【吉見座長】

ありがとうございました。非常に手際よくまとめて頂きました。今のまとめに綺麗に示されていますが、色々な議論が出て、色々なことを報告書に盛り込んでいくんですけども、事務局との話し合いの中で、柱は1本ハッキリしたものを立てるべきだと申し上げました。これまでの議論を全部取りまとめるというか、軸となる考えや提案とは何だろうかと事務局と議論をした時に、やはり「創造」「クリエイション」ではないかという風に、両者が考えるに至ったわけです。ある種、新しい東京図書館は、東京都創造図書館というか、Library For Creation であり、この「クリエイション」には、色々な意味が込められています。それはこれから深めていきたいと思いますが、「創造」「クリエイション」という柱を立てる事によってかなりの部分、これまで出てきた議論を繋いでいるのではないかということ、まずは今日ご提案して皆さんご意見をいただきたいと考えております。

そこで2点、ご発言いただきたいのですが、1つは私と事務局との議論の中では、やはり「創造」「クリエイション」が、未来の図書館の1つの方向性としてはっきり打ち出して良いのではないかという結論に至っているんですけども、それで本当にいいかということについて、ご意見いただきたいと思います。それから、もしそれでいいということでしたら、この Who や How、Where 等、ここに連なってくるいくつかの柱があり得るわけですが、そこは先ほどご説明いただいた中央図書館の新たな機能に関わって、より具体化してくるわけです。そこについて、こういう機能やこういう柱、枝がクリエイションの周りに立っていくと良いのではないかという意見もいただきたいと思います。まずはひとわりご意見をいただければと存じます。

【田中元子委員】

事務局の皆さん、吉見先生ありがとうございました。この Library for Creation、これまでの議論を踏まえた上でも共感するところですよ。全然違和感なくまとめを伺いました。一点、今日の会議の前に話したいと思ったのは、前回、現地に集まって、手短な形ではありますが、現在の中央図書館のご案内を司書さんにして頂きました。司書さんは30数年、現場でみなさんと直接会い、現場を見て、育ててこられた重要人物だと感じました。ほんの数分しかいられていませんでしたが、私この会議の中で、「これまでの話」に触れる部分が少なかつたなと思っています。蔵書や機能ではなくて、そこにいらした司書さんや来場者、そういった現場の声やアクティビティも触れながら進められれば良かったと感じました。これから議論を続けていくのであれば、是非、これまでの中央図書館の方向性や夢といったものも忘れずに触れていきたいと個人的に思っています。

【吉見座長】

ありがとうございます。まさしくその通りで、私自身も自分の原点となる「都市のドラマトゥルギー」という作品を約40年前に書きましたけれども、東京都立中央図書館の東京室がなければありえなかつた本です。色んな人の色んな思い出を、この図書館を新しくするプロセスの中で形にして行く。それを繋いでいくと言いますか、水平的に色んな人と人が図書館で繋がるというだけではなく、過去と未来が繋がっていく。そういうイメージが必要ではないかと思ひます。中島先生、どうぞ。

【中島委員】

素敵なたまとめありがとうございます。こういう新しい存在の図書館が出てくるであろうという予感だけでも、今すごくワクワクしています。Library For Creation というのは非常にいいまとめだと思います。Who は色んな方のことだと思いますので、例えば高齢の方、障害のある方という前提で、ここの視点で見たらどうだろう、こういう場所があったらいいんじゃないか、こういうイベントがあったらいいんじゃないか、こういう呼びかけをしたらいいんじゃないか、と言うような、多様でありながら、各々に合わせたようなものを、色んな軸で見るのが大事かと思ひます。How にも繋がるかも知れませんが、やはり環境、ヘルシンキの話がありましたが、そもそもどういう空間づくりをして、どんな色で考えるかといったコンセプトと空間づくりというものがすごく密接に関わってくると思ひます。あと、どういう道具を置くか、あるいは雰囲気等、色んなものが密接に関わっ

てくると思います。資料に、道具や、どのようなことが行われるかが書かれていますが、合わせて、空間としてどうあるべきか、例えば天井の高さや形といったものが影響する部分もあるので、その辺りも議論できると良いかと思います。

何より、今すぐこの議論が面白いので、まさにこの議論を開くといいなと。今回、私たちが SNS でこういう会議をやっていると発信させてもらいましたが、市民参加型で作っていくプロセスそのものが、面白いことになるのではないかと思います。これからの図書館がどうあるべきかを議論しながら、空間はどうあるべきか、どんなことがあったらいいかということ、うまく仕掛けていけると面白い。東京全体を図書館と考えるといったお話もありましたが、図書館として、そういうユビキタス的にやるにはどうしたらいいか。周りの大学や学校、企業、或いは高齢者施設、不登校の子達等、周囲との関係性の中で、また出てくる部分もあると思います。そこでどういうことができるのか、その連携での活用も考えていけるといいのかなと思った次第です。

【吉見座長】

ありがとうございました。田中元子委員はいわば「縦に繋がる」、中島委員は「横に開く」という話をしてくださいました。横に開くのが、単に市民というのは勿論、それだけではなく、大学や企業等色々あっていいのではないかという。全く同感です。そういうことを上手に整理しながら具体的な機能に繋ぐことができたらいいなと思います。

恐らく今回の有識者会議の報告書は、多くの東京都民に受け入れられなければならない。そのためコンセプトは明確である必要があり、そうしないと曖昧にされてしまう。明確なコンセプトをしっかりといくつかの根が支える、ちゃんと根が生えていて、そう簡単にはこの大木は動かさない、と言った形にして行きたいと思っております。

事務局に発言を求めたいのですが、今、委員のお二人から創造図書館、東京都創造図書館、Library For Creation という方向性にご賛同いただいたので、その方向でもう少し考え方を詰めていきたいと思っております。その時に、縦に繋がる、横に開くというアイデアが出ました。ここから、先ほど事務局からご提示いただいた4つの新たな機能にうまくつながる具体的な装置や機能、イメージが出てくると良いということかなと思いますが、事務局サイドではここから先の議論はどうなっていくのが良いでしょうか？

【事務局】

4つの機能を整理させていただいているところですが、具現化して行くためのアイデアや事例等がもしあれば、お聞かせいただくとありがたいと思っております。

【吉見座長】

クリエイションに関して言えば、多様性やアクセシビリティという話が出てくる時に、世の中的には diversity and inclusion と言うわけですね。今それはとても大切な価値ですが、図書館にとっては and creation というこの3つ目が大切だと思います。diversity や inclusion、あるいは知のストックというものを creation につないでいく。これを過去のアーカイブ、trajectory、そういうものを踏まえつつ、考えていくことになると思います。クリエイション、創造というところに、縦と横の話が出ましたけれども、中央図書館の新たな機能に繋げてご意見いただけるといいかなと思うんですが、いかがでしょうか？

【田中元子委員】

事例をご紹介したいところではありますが、多分見たことのない図書館をつくらうとしているのではないかと思うので、私の知見や見分の中では、ちょっと出せないです、ごめんなさい。色んな事例を参照することも大事ですが、今言ったとおりこのクリエイションに対してフォーカスするということは、中島委員がおっしゃったように、道具やコンテンツだけではなく、その空間がどうあるかということも重要な部分なので、総合的にこのクリエイションに繋がっていくにはどうするのかということについては、ハードもソフトも考えなければいけないと思っています。色んな道具や本、情報がここにあって、なんでも作れますよと言っても、中島委員も前に話されましたが、日本では、大人は気後れして動けなくて、子供たちの遊び場になるか、大人の時間を設定するか、と言う形になってしまいます。あらゆる年齢、属性の人たちにとって、クリエイティビティに繋がっていくという感性を育てる上では、ここでどんな人が日々の運営をして、皆さんが使っていくことを喚起して行くかということも大事なところなので、そこもすごく考えて欲しい。

そういう意味では、大事な司書さんのことをこれまで話すこともなくきていますが、そのようなところに神経が行き届いて初めてクリエイティブな場面に人を誘導してあげられるコミュニケーションがあると思います。なので、参加意識や人を繋げていくことを考える時には、色んな方に意識を配られたらいいなと思っています。

【吉見座長】

ありがとうございます。未来の図書館を想像して行く時に、Librarian の在り方も、過去の蓄積を引き継ぎつつ、新しい形に変化して行くということかと思います。

中島委員、何かございますでしょうか？

【中島委員】

はい、ありがとうございます。例を挙げる形でよろしいでしょうか。

【吉見座長】

そうですね。事務局としては、この報告書が出来ていく形を考えると、まず大きな柱として東京都創造図書館、Library for Creation を目指す。これは世界的に見てもものすごく新しい図書館の形なんだということを書いていくことから始まると思うんですよ。

そしてその大きな柱、つまり Library for Creation というのは、未来の東京都の図書館の形だということバーンと出した後に、ではそれは誰のための図書館、誰による図書館なの？それをどのように実現して行くの？という話が続きます。そこまでは抽象的な話なので、具体的にそれを建物や機能、司書、それからそれぞれの例えばカフェやコモンズの機能、あるいは映像的な機能等色々な機能が入ってくるんだと思います。そういう機能を入れて行った時に、それはどういう形になるのかという話が、新たな機能といったところと繋がってくる。それをある程度、具体的に示して行く必要があって、それは実現過程でもっと詰まっていってしまうのですが、「立派なことを言っているけど、どうやって実現するかわからないじゃない」と言われると困ってしまう。「こうすれば実現するんだ」ということを、ある程度報告書の中で示せるといいなと思います。

【田中元子委員】

ごめんなさい。質問ですが、それは例えばプロポーザルコンペ等、そういった実施設計の与件というか、その条件の参考になっていく部分でもありますね？

【吉見座長】

はい、そうだと思いますね。最終的にはそうだと思います。

【田中元子委員】

ありがとうございます。

【中島委員】

ありがとうございます。いくつか画面共有させて頂いても大丈夫でしょうか？

まず、ヘルシンキ中央図書館です。まずこういう空間が非常に面白い形で作られていま

すが、やっぱり私が面白いなあと思ったのは、1階がイベント用スペース、会議用スペース、シネマカフェスペース、2階は音を出してもいいということで、楽器の演奏、撮影・現像その他複数のスタジオ、3D スキャナー、レーザーカッター、ミシン刺繍機等がある。これが世界のスペースの流れだと思います。3階は普通の図書館と同じような設備です。でも、こういうものが総合的に新たな図書館であるという見せ方をしていると思います。その中で、雑誌や映画、楽譜ゲームの貸出しも行われており、普通の図書館と似ていますが、そこには少し拡張されたような物もあります。楽譜の収蔵点数9千点という形で非常に総合的な、必ずしも言語だけではないというようなことと、あとクリエーションという視点がやはり1階、2階にある。でも空間が緩やかに繋がりながらも分けられていることで、うまく静かに読みたい人も、音を出してみたい人も交流したい人も、1階が交流という点ではかなり使われているのではないかと思います。そういうことができる。

また、前回もお話ししましたが、このライブラリーメーカースペースの流れで、これをそのまま日本でやった時に、日本ではハレーションがありそうだという気はします。海外の事例で感じられるのが、勉強というよりは、面白そうであると言うところだと思います。では3Dプリンターを置けばいいのかというと、そうではないと思いますが、例えばライブラリーメーカースペースで検索してみると、カラフルな場や色んな人が何かを楽しそうに作っている場面が出てきます。特定の限られたマニアックな人が何かをやっているということでもなく、子供たちのプログラミングスクールみたいなことでもない、子供も大人も入り交じって楽しそうにしている「雰囲気」がまずあると思います。

そして、田中委員がおっしゃったとおり、ライブラリーメーカースペースと合わせて大事なのがライブラリーメイカーズで、人づくりが必ず行われている。予算も投じられる。司書さんが本当に大事な存在です。ただ、こういう新しいことをしようとした時に、特に日本だと文系理系に分かれがちなこともあり、いきなりだとハレーションと言うか、恐怖感のようなものがある。まず近隣の専門高校の生徒や大学生等、新たな存在がここにバイトとして入る、あるいは司書さんでもやっぱりやりたいという方も絶対いらっしゃるはずなので、育成のようなことができると良いと思います。図書館が新しく出来上がるのがもう少し先だとしても、色んな場所で臨時的に始めて、そこに人が育っていく、そこには従来の司書さんがされてきたことが活かされるものを考えていく必要があると思います。

また、ご存知の方も多いと思いますが、エキスポプラトリウムと言うミュージアムです。ミュージアムの転換点として、たぶんこのエキスポプラトリウムが大きいと思いますが、やはり見るだけでなく、自分が体験する、ティンカリングができる場所として生まれたところです。展示物が作られている様子も全部公に見えるような形になっていて、サイエ

ンスや数学の面白さが体験的にわかるものができており、それを作っている過程も全部見せてしまうと言う形で工房のような形になっています。時々ワークショップもあって、参加者も来た方も何かを作り出すことができるという両面があったかと思います。この辺りも外国の事例として参考になると思います。

そして日本の例では、パナソニックさんの AkeruE です。私が好きなのはコスモスというところ。季節ごとに1つの問いが出されて、答えを形にするということで、机があり、みんなが作れる状態になっていて、作ったものが1か月ぐらいここで展示される。来た人たちが、実はそのミュージアムで展示されるものを自分たちが作れるということで、作り手側に本当になれる場が用意されています。これはすごく面白いと思います。ここにも技術が入っていて、お皿の上に乗せると、そこに光が当たったり、色が変わったり、それを近くのモニターに映したり、こういった演出をどうするかというのはありますが、いちばん良いのは、来た人が作ったものが展示される「余白」のようなものがあることで、先日、吉見先生からもありましたが、小説を書いてここで出せるかも知れない、自分の作ったものが図書館に貢献できるかもしれない、といった「余白」があるといいなという点で、ひとつ参考になるかと思いました。

VIVISTOP も、日本で考えると図書館と繋がりにくいかも知れませんが、ものづくりの場所で面白い1つのコンセプトです。学校と提携したもので、一般市民や様々な年齢の人が同時に入り込むというものを実現したいというのがコンセプトの中にあって、かなり開かれた状態で試されています。ものづくりができることもそうですが、その場の思想のようなもので、なるべく開かれる。図書館は元々開かれた場だと思うので、その開かれているところを、できるだけ障害のある方にも来てもらう、おばあちゃん、おじいちゃんにも来てもらう、来てもらって何かやる、といった形でなるべく開いていくことが必要だと思います。

もう1つ、建築家の小堀哲夫さんと万博の仕事を一緒にさせていただいていますが、彼が梅光学院大学を作った話がすごく面白い。実際、作られたものはすごく面白い形で、中に境界線がない、先生の部屋と子供たちの所が繋がっている、天井の高さや、地面や壁にも全部書けるとかいろいろあるんですが、やはりいちばん面白いのは作り方です。作る途中で学生さんや先生達と何回もワークショップを繰り返して、21世紀の大学はどうあるべきか、いや、そうは言っても梅光ではなかなか難しいんじゃないか、そういうことをみんなを巻き込んで繰り返しながら、最終的にみんなが納得して、「自分が作り手」という形で作られた場所になります。今回も、結果だけではなく、作り方のところで、なるべく近隣の方を巻き込んでワークショップを繰り返しながら、空間設計にも生かすといった

ことができるというのではないかと考えています。そういう作り方も含めた設計があるんだろうなと思っている次第です。

【吉見座長】

ありがとうございました。私からは、具体的な機能として、2つ提案しておきたいと思います。一つ目は、例えば、その具体的な空間の中で来た人たちに考えてもらえる4つぐらいの問いがありえると思うんですね。1つは「あなたは誰ですか？」という問いです。「そんなの分かっているよ」ということかも知れないけど。でも図書館、NDLの電子アーカイブがものすごく充実していますよね。最近爆発的に良くなったと思うんですけど、国会図書館の電子書籍は公開もされているし、色んな人の、例えば私は自分のひいおじいちゃんや、自分の親戚の名前をそこに打ち込むと、結構書籍が出てくるんですよ。出てくる人は多いと思うんですよ、ものすごい数入っているから。そうすると図書館は、それぞれの人の家族や親戚、知り合いだとか、色んな人の繋がりが見えるというか、先程のインストラクターのような司書、ライブラリアンがちょっと助けてあげることによって、これは高齢者に良いと思うんだけど、由来や知り合い、親戚、おじいちゃん、おばあちゃん、そういう人たちが全部つながって見えてくる。自分が歴史の中でどこにいるか、誰なのかということを知る機能が1つ図書館でできるんですね。

それからもう1つは「ここはどこですか？」という問い。ここは、例えば麻布や浅草、上野のどこか、あるいは地方等、色々あると思うんです。各地のローカルヒストリーも、Wikipediaだけではよく分かりませんが、図書館で調べると、少なくとも東京近郊であれば相当詳しく分かるんですよ。そうすると、この問いに答えられる。

もう1つは「今はいつですか？」と言う問い。当たり前の問いですが、すごく長い、色んな歴史がありますから、その中で今というものを知ることができる。

そして最後は「未来をどう作りますか？」。ヒューマンフューチャー、人間の未来をどう作っていきますかということで、このような問いへの答え方を色々instructしてあげることにより、各々が調べていった結果を本にできると思うんです。

これは2番目の話ですが、前から言っているBook Beyond Book、後ろのBookは、今ある本、基本的には出版社により大量生産、出版される本ですけども、前のBookは、インタラクティブで視聴覚映像が中にどんどん入っていく本であり、万人が本を書いていくことになる。それは単にネットで、ツイッターで発信するよりハイレベルだと思いますが、そういう「あなたは誰ですか？」「ここはどこですか？」という問いに対するそれぞれの人の答えがあり得ると思うので、Book Beyond Book、来た人たちがどんどん本

を書いて、それが図書館の収蔵物になっていく。電子的ですが、収蔵物になっていくような参加型の仕組みを図書館自体の中に組み込んでいくと、それ全体がクリエイションということだと思います。つまり、重要なことは、この Library for Creation のクリエイションは、特別な人ではなく、図書館に来た人全員が、それぞれの仕方でもクリエイションする。その仕組みをライブラリーは提供する。そこがポイントではないかと思います。

【田中元子委員】

「ここがどこか」「今いつなのか」「私は何者なのか」ということは、最初から私が話していた「人間とは何か」ということそのものなんです。私がこの「人間とは何か」をこの図書館でやって欲しいと強く前から言っているのは、科学的に人間とつちらかすと言うこと以上に、人間は、うっかりするとこういうこともしでかしてしまうのだということや、どんなにコンピューターが速くなっても、自分の脳はそんなに機能的に変わらない。自分の、人間の有限性に対して何ができるかということを楽しめることが、実体がやものがあるということに等しいことだと思っています。無限であることとデジタルが繋がるのであれば、有限であることと、人間や今ここという実体が繋がっていると思います。リアル空間として中央図書館がある限り、そのリアリティに対しどう触れるかという価値、意味を求めるといふか、そこにサジェストすると大事なことだと思います。「人間とは何か」「自分とは何か」ということへの答えはないんですが、それに対して多角的に考え、人間は、良くも悪くもこういう生き物だということ一度触れられたら良いと思います。

そして「ここはどこか」ということで、東京へのフォーカスはすごく大事だと思います。別の会議で東京都の仕事をしていて、「東京といえば江戸」という話が頻繁に出てきますが、江戸を美化した東京のブランディングをなぜ続けるんだらうって個人的には思っています。江戸に一瞬の理想形があったとしても、それを手放したのもまた人間のチョイスだったわけですね。そういうところに私は学びがあると思っているので、東京で起きたことや、今後起きうるということ、今、私は東京の中の何番地にいるんだらうという時代的な立ち位置等を考えたり、変えたりできる場所になるのは、すごく嬉しいことだと思います。それに対しどんな技術や空間が必要かと言うことは、ここでもある程度話せると思いますが、それは建築家の皆さんの方がずっと詳しいです。どんな人間がどんな状況、心理状態になって、どう情報と向き合うか、何人ぐらいの人数が、どのような場所でどんな活動するかに関しては、コンペをするのであれば、応募要項の中に取り入れて一緒に考えていける枠組みを作る。良いコンペを目標にするというのも良いと思います。

【吉見座長】

ありがとうございました。今の言葉を受ければ、創造図書館は人間図書館。キャッチフレーズ的に言えば「創造図書館、人間図書館 in 東京」。それは縦につながり、横に開く。中島委員が言って下さったような様々な建築や、映像・音の機能、膨大なアーカイブ等を要素として綺麗な絵に描けるような気がします。必要があれば、私も含め各委員にも聞いていただいて、文章を直していくという進め方で良いかと思いますが、事務局はいかがでしょう？

【事務局】

今お話いただいたような形で進めさせていただければと思います。これまでのご意見を元に文章を書かせていただきますが、本日の議論を踏まえまして、下案を作りまして、ご意見等いただきたいと思っております。

【吉見座長】

よろしく申し上げます。全く余計なことを1つ、田中元子委員の発言に刺激されて付け加えれば、江戸の「江」も元々ハーバーなんですよ。 「戸」も「谷戸（やと）」の「戸」で要するに入り江のこと。だから江戸とは入江の意味ですよ。つまり、東京湾の外の、房総半島や三浦半島、あるいは紀伊半島等、色んなところから船がたくさんやってきて、それでこの江戸の地に入植して行くわけですから。だからもともと、そういう風な外との、外の海、水路ですけれども、基本的に水路での外の世界とのハブ、あるいはこのネットワークの結節点、これが江戸の意味なので、そういう意味では横に開く場としてあるんだということで、江戸は過去ですけれども、そういう話と結構つながる気がする。

【田中元子委員】

東京は現代においても物流やあらゆる分野のハブであることは間違いないと思いますし、ハブとしての価値をこれからも維持向上させていくためには、この中央図書館が、ここで全てが完結すること以上に、様々な国や時代との結節点になっていることも、東京らしいスタンスだと思います。是非そういったことをコンペの中にも取り入れて、設計者の皆さんにも共有いただいて、極端なアイデアかも知れませんが、その設計チームの中に一人でもいいから、設計以外の哲学や歴史、中島先生のような数学の方等、多様な属性のチームによって取り組むという座組も提案したいと思います。

【吉見座長】

賛成です。是非、それはいいと思います。

何か言い残していること等ございましたら、ご発言をお願いします。

【田中元子委員】

大丈夫です。

【中島委員】

一言だけ。ソフトとハードと言いますか、やはり中の思想や空間をどうするかは、すごく手が掛かる、時間がかかると思います。先ほどの田中委員の提言は私も賛成ですし、人間図書館も面白いなと思いますが、ソフト面だけでも違う場所で試してみるということも含めてやっていけると非常に面白いかなと思います。

【吉見座長】

良いアイデアを色々いただきましたので、報告書に盛り込めればと思います。最後、事務局から今後の段取りをご説明いただいて、会議を閉じたいと思います。

【事務局】

吉見座長、田中委員、中島委員、ありがとうございました。頂いたご意見を踏まえ、取りまとめの作成を進めたいと思っております。案ができましたら、事前にお送りして、ご説明、ご意見を伺う場を設定させて頂きたいと思っております。改めてご連絡差し上げますので、お忙しい中恐縮ですけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

【吉見座長】

はい、ぜひ「創造図書館は人間図書館」、これを活かしていただきたいと思います。

【事務局】

良い言葉をいただきありがとうございました。会議は以上で終了となります。本日はお忙しい中ご出席いただき、ありがとうございました。